

平成21年度 病害虫発生予報 第10号

平成22年1月22日
栃木県農業環境指導センター

灰色かび病、ハダニ類の発生に注意しましょう！

予想期間 1月下旬～2月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量が多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは高い見込みで、発生にやや適している。(±～+)
- (3) 対策
- ・スパイデックス[適用作物：野菜類(施設栽培)]等の天敵農薬を使用する場合は、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。
 - ・発生が見られた場合、下葉かきを行い発生密度を下げ、サンクリスタル乳剤[適用作物：野菜類]等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・サンクリスタル乳剤は、高温時には薬害を生じることがあるので使用を避ける。

2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや少ない。(-)
 - ・今後、施設内が多湿となりやすく、発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内の低温多湿が発生助長要因となるので、下葉を取り除き風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
 - ・発病果実等は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・発生の初期にダイマジン、フルピカフロアブル等を散布する。
 - ・降雨が続いて湿度が高い場合は、スミレックスくん煙顆粒等の使用も効果的である。

3 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや少ない。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは高い見込みで、発生にやや適している。(±～+)
- (3) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
 - ・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
 - ・発生初期にアミスター20フロアブル、ベルコートフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・アミスター20フロアブルは高温多湿条件下では薬害が生じるので使用しない。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量が多い。(+)
 - ・今後、施設内が多湿となりやすく、発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、植物体表面の結露は発病を助長するため、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤[適用作物：野菜類]のダクト内投入を行う。また発生初期に、ゲッター水和剤、セイビアフロアブル20等を散布する。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは高い見込みで、発生にやや適している。(±~+)
- (3) 対 策
- ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は埋設やビニール袋等で密封し枯死させてから処理する。
 - ・施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類を捕殺する。
 - ・サンクリスタル乳剤[適用作物：野菜類]等を定期的に散布し、コナジラミ類を低密度に抑える。
 - ・コナジラミ類の発生が見られる場合は、チェス顆粒水和剤、モスピラン水溶剤等を散布する。
- (4) 備 考
- ・サンクリスタル乳剤は、高温時には薬害が出やすいので使用を避ける。

6 には 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・今後、施設内が多湿となりやすく、発病に好適となる。(+)
- (3) 対 策
- ・ハウス内が多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
 - ・発生初期に、ストロビーフロアブル、セイビアーフロアブル20等を散布する。

7 きく 白さび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生量は多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは高い見込みで、発生にやや適している。(± ~ +)
- (3) 対 策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
 - ・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
 - ・発生が見られる場合はE B I剤、ポリオキシシンA L水溶剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考
- ・ポリオキシシンA L水溶剤は薬害を生じる恐れがあるので、着蕾期以降、高温時の散布は避ける。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	やや少	平年並	きゅうり	アザミウマ類	少	やや少
	コナジラミ類	平年並	やや多		コナジラミ類	少	やや少
トマト	葉かび病	平年並	平年並	きく	ハダニ類	やや少	平年並
きゅうり	うどんこ病	やや少	やや少		アザミウマ類	平年並	やや多

農薬を上手に使いこなしましょう！

ハウス内で薬剤を散布するときは、午前中のうちに葉裏にも薬剤がよくかかるように散布する。同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤散布については、ミツバチ、マルハナバチに対する安全日数を十分考慮する。

1か月気象予報（予報期間1月16日から2月15日 1月15日気象庁発表）

向こう1か月の天気は、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。平均気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量と日照時間は平年並の確立が40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気 温	20%	40%	40%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

詳しくは農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問い合わせください。

当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成21年度 病害虫発生予報 第11号

平成22年2月19日
栃木県農業環境指導センター

曇りや雨の日が多くなります。灰色かび病の発生に注意しましょう！

予想期間 2月下旬～3月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや適している。(±~+)
- (3) 対策
- ・スパイデックス[適用作物：野菜類(施設栽培)]等の天敵農薬を使用する場合は、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。
 - ・発生が見られた場合、下葉かきを行い発生密度を下げ、サンクリスタル乳剤[適用作物：野菜類]等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、ダニサラバフロアブル、マイトコーネフロアブル等を葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (4) 備考
- ・サンクリスタル乳剤は、高温時には薬害を生じることがあるので使用を避ける。

2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の降水量は平年並もしくは多く、日照時間が少ない見込みで発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内が多湿にならないように換気に注意するとともに、下葉を取り除き風通しを良くする。また、かん水は必要最小限にとどめる。
 - ・発病果実等は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・発生の初期にジャストミート顆粒水和剤、アミスター20フロアブル等を散布する。
 - ・降雨が続いて湿度が高い場合は、ロブラールくん煙剤等の使用も効果的である。

3 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量が平年並もしくは多い見込みで発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
 - ・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
 - ・発生初期にストロビーフロアブル、フルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は多い。(+)
 - ・向こう1か月の降水量は平年並もしくは多く、日照時間が少ない見込みで発病に好適となる。(+)
- (3) 対策
- ・ハウス内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、植物体表面の結露は発病を助長するため、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
 - ・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤[適用作物：野菜類]のダクト内投入を行う。また発生初期に、カンタスドライブフロアブル、ジャストミート顆粒水和剤等を散布する。

(4) 備考 ・「病害虫発生予察注意報 第1号」を発表した。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対策 ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は埋設やビニール袋等で密封し枯死させてから処理する。
・施設内に黄色粘着板を設置し、コナジラミ類を捕殺する。
・エコピタ液剤[適用作物：野菜類]等を定期的に散布し、コナジラミ類を低密度に抑える。
・コナジラミ類の発生が見られる場合は、クリアザールフロアブル、チェス顆粒水和剤、アブロードエースフロアブル等を散布する。

6 には 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない。(-)
・向こう1か月の降水量は平年並もしくは多く、日照時間が少ない見込みで発病に好適となる。(+)
(3) 対策 ・ハウス内が多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
・発生初期に、アミスター20フロアブル、ポリオキシソルボンA L水溶剤等を散布する。

7 きく 白さび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い。(+)
・向こう1か月の降水量は平年並もしくは多く、日照時間が少ない見込みで発病に好適となる。(+)
(3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
・発生が見られる場合はE B I剤、サンヨール等を葉裏にもよくかかるように散布する。

8 その他の病害虫

	現況	発生予想		現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	きゅうり	うどんこ病	平年並
	コナジラミ類	平年並		アザミウマ類	やや多
トマト	葉かび病	やや少	きく	ハダニ類	やや少
	うどんこ病	やや多		アザミウマ類	やや少

早春の病害虫防除対策

いちご親株 ハダニ類

- ・雨よけ施設はハダニ類の発生が多くなるので、定植する親株はハダニ類がついていない株を選び、施設にハダニ類を持ち込まないようにしましょう。また、ハダニ類の発生初期に殺ダニ剤を散布して防除しましょう。

1か月気象予報(予報期間2月13日から3月12日 2月12日気象庁発表)

天気は、平年に比べ曇りや雨または雪の日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。降水量は平年並または多い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	20%	30%	50%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	30%	30%

NEWS & INFORMATION

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。ご活用下さい。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。
当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成21年度 病害虫発生予報 第12号

平成22年3月18日
栃木県農業環境指導センター

灰色かび病の発生に注意しましょう！ ハダニ類、アザミウマ類、コナジラミ類は初期防除が大切です

予想期間：3月下旬～4月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は多い。(+)
 - ・日中に換気が十分行われるようになるため、発病にやや不適となる。(-)
- (3) 対策
- ・下葉の葉柄等に発生が多く見られるので、下葉を取り除き、風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
 - ・発病部位は伝染源となるので速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生が見られる場合は、セイビアーフロアブル20、カンタスドライフロアブル等を散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや多い。(+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高く、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・発生が見られたら、下葉かきを行い、発生密度を下げ、エコピタ液剤[適用害虫：ナミハダニ]等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、スターマイトフロアブル、コロマイト水和剤等を散布する。
 - ・薬剤散布は、葉裏に十分に薬剤が付着するよう丁寧に行う。

3 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は多い。(+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高く、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
 - ・施設内に青色粘着トラップを設置し、アザミウマ類の早期発見に努める。
 - ・発生初期から、スピノエース顆粒水和剤、モスピラン水溶剤等を散布する。

4 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は多い。(+)
 - ・夜温が高くなり暖房機の稼働時間が減少し、ハウス内が多湿となりやすい。(+)
- (3) 対策
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花弁や発病果、発病葉は、伝染源となるので早急に取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生が見られる場合は、セイビアーフロアブル20、トータレックス顆粒水和剤等を散布する。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は平年並。(±)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高く、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去し

- た葉は、ビニル袋等で密封し枯死させてから処理する。
- ・施設内に黄色粘着トラップを設置し、コナジラミ類を補殺する。
 - ・エコピタ液剤[適用作物：野菜類]等を定期的に散布し、コナジラミ類を低密度に抑える。
 - ・コナジラミ類の発生が見られる場合は、サンマイトフロアブル、バリアード顆粒水和剤等を散布する。

6 きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生は多い。(+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高く、増殖に適している。(+)
- (3) 対 策
- ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
 - ・施設内に青色粘着トラップを設置し、アザミウマ類の早期発見に努める。
 - ・発生初期から、スピノエース顆粒水和剤、アフーム乳剤[適用作物：ミナミキイロアザミウマ]等を散布する。

7 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想
いちご うどんこ病	平年並	平年並	きゅうり 褐斑病	平年並	やや多
アブラムシ類	平年並	やや多	コナジラミ類	やや少	平年並
コナジラミ類	平年並	やや多	にら 白斑葉枯病	平年並	平年並
トマト 葉かび病	少	平年並	きく 白さび病	平年並	やや多
きゅうり 灰色かび病	多	やや多	ハダニ類	多	多

春の病害虫防除対策

水稲 病害虫防除

- ・温湯処理による種子消毒は、適正な温度（60℃）と処理時間（10分）をきちんと守らないと効果が不足したり、種子の発芽障害を生じる恐れがありますので、処理する種籾量を守り、浸漬後上下に攪拌するとともに、処理後は流水で速やかに冷やしましょう。

麦類 赤かび病

- ・麦の生育状況をよく観察し、適期に防除を必ず行いましょう。特に、六条大麦や追肥をした小麦（タマイズミ等）は2回防除を徹底しましょう。

(防除適期)

二条大麦：穂揃い期7～10日後

六条大麦：開花始め（おおむね出穂4日後）と1回目の10日後の2回

小麦：開花始め（おおむね出穂7日後）と1回目の10～20日後の2回

1か月予報（予報期間3月13日から4月12日 3月12日気象庁発表）

天気は、数日の周期で変わってでしょう。週別の気温は、1週目は高い確率50%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
気温	30%	30%	40%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

農薬を上手に使いこなしましょう！

ハウス内で薬剤を散布するときは、午前中のうちに葉裏にも薬剤がよくかかるように散布する。同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択する。

NEWS & INFORMATION

「平成22年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」は4月上旬に発行されます。お求めの方は、(社)栃木県植物防疫協会(028-683-5533)にお問い合わせ願います。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第1号

平成22年4月23日
栃木県農業環境指導センター

麦類赤かび病の防除をしましょう！ ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類の防除は早めに実施しましょう！

予想期間 4月下旬～5月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 麦類 赤かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 ・気象予報では降水量は多い見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対策 ・出穂期～乳熟期の降雨・曇天の連続は、感染が急激に拡大する恐れがあるので、予防散布を行う。
・二条大麦は穂ぞろい期7～10日後、六条大麦は開花始めと開花10日後、小麦は開花始めと開花10～20日後に散布し、多発の恐れがある場合はさらに追加防除を行う。
・シルバキュアフロアブル、ストロビーフロアブル、チルト乳剤25など系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 ・現在の発生量は多い。(+)
(3) 対策 ・日中に換気が十分行われるようになるため、発病にやや不適となる。(-)
・ハウス内の低温多湿が発生助長要因となるので、下葉を取り除き風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
・発病部位は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
・発生の初期にダイマジン、フルピカフロアブル等を散布する。

3 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない。(-～±)
(3) 対策 ・向こう1か月の平均気温は低い見込みで、発生にやや適している。(±～+)
・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
・発生初期にE B I剤、ベルコートフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
(4) 備考 ・E B I剤・E B I混合剤は耐性菌の発生を防止するため、合わせて年2回以内の使用とする。

4 いちご、きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 ・現在の発生量は、いちごで平年並、きくでやや多い。(±～+)
(3) 対策 ・気温の上昇とともに、発生が増加する。(+)
・発生密度が高くなると防除が困難となるので、発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布してハダニ類を低密度に抑える。
・いちごでは、下葉かき作業後に、マイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏によくかかるように散布する。
・きくでは、ダニサラバフロアブル 適用作物：花き類・観葉植物、サンマイトフロアブル等を葉裏によくかかるように散布する。
(4) 備考 ・雨よけ施設のいちご親株床では、ハダニの発生が多くなるので注意する。
・親株床にハダニを持ち込まないように本ぼの管理作業とは別に作業を行う。
・発生がみられる場合はランナー発生が多くなる前に、ダニの初期防除を行う。

5 いちご、きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根拠 ・現在の発生量は多い。(+)
(3) 対策 ・気温の上昇とともに、発生が増加する。(+)
・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内外の除草を行う。
・青色粘着紙を設置し、発生状況を把握するとともに早期防除を行う。
・発生が見られた場合は、スピノエース顆粒水和剤、アーデント水和剤などをローテーション散布する。

6 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量は多い。(+)
・日中に換気が十分行われるようになるため、発病にやや不適となる。(-)
(3) 対 策 ・ハウス内が多湿にならないよう換気やかん水に注意する。
・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ポリオキシソルボン水溶剤、ベルコートフロアブル等を散布する。

7 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並。(±)
・気温の上昇とともに、発生が増加する。(+)
(3) 対 策 ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は、ビニル袋等で密封してから処分するか土中に埋める。
・タバココナジラミが発生している場合は、アブロードエースフロアブル、クリアザールフロアブルなどを散布する。

8 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根 拠 ・昨年の発生は多かった。(+)
・気象予報では平均気温は低く、降水量は多く発生にやや適している。(±~+)
(3) 対 策 ・芽基部病斑は摘み取る。
・芽基部病斑上の胞子形成抑制のためE B I剤、チオノックフロアブル(トレノックスフロアブル)、デランフロアブルなどを散布する。
(4) 備 考 ・昨年多発した園では、防除を徹底する。
・E B I剤・E B I混合剤は耐性菌の発生を防止するため、合わせて年2回以内の使用とする。
・チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは同じ成分(チウラム)なので、総使用回数に注意する。

9 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想		
いちご	アブラムシ類	平年並	やや多	きゅうり	コナジラミ類	平年並	やや多
	コナジラミ類	平年並	やや多	たまねぎ	べと病	やや多	平年並
トマト	葉かび病	やや少	平年並	果樹	モモシンクイガ	平年並	平年並
きゅうり	褐斑病	平年並	平年並	さく	白さび病	やや多	やや多

イネ縞葉枯病に注意しましょう！

昨年11月に実施しましたウンカ類の調査では、ウンカ類幼虫の越冬前密度が平年より高く、ヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯病保毒虫率も県中部から県南部の一部で高くなっています。イネ縞葉枯病の発生拡大が懸念されますので、コシヒカリなど(感受性品種)では、防除効果の高い箱施用剤などを利用し、防除対策を実施しましょう。

農薬を上手に使いこなしましょう！

ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択する。
農薬を散布する場合には、周辺住民に周知を図り、散布の時間帯に十分注意する。
施設栽培では今後大きくサイド換気されるので、薬剤散布する場合はドリフトに注意しましょう。

1か月気象予報(予報期間4月17日から5月16日 4月16日気象庁発表)

関東甲信地方の天気は1週目は曇りや雨の日が多くなりますが、2週目以降はおおむね数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	50%	40%	10%
降水量	30%	30%	40%
日照時間	40%	30%	30%

NEWS & INFORMATION

「平成22年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」は4月上旬に発行されています。お求めの方は、社団法人 栃木県植物防疫協会(028-683-5533)にお問い合わせ願います。

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第2号

平成22年5月21日
栃木県農業環境指導センター

ハウス栽培は栽培終了時に蒸しこみを行い害虫を駆除しましょう！

予想期間 5月下旬～6月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 小麦 赤かび病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量は少ない。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高く、天気はぐずつく時期もある見込みで発生に適している。(+)
- (3) 対策
 - ・小麦は1回目の10～20日後に2回目の防除を行い、多発の恐れがある場合は3回目の防除を行う。
 - ・使用薬剤は同系統薬剤の連用を避け、収穫前日数に留意して選定する。
 - ・植物防疫ニュース(速報No.1)「麦類赤かび病の多発が懸念されます。追加防除により拡大を抑えましょう。」参照。

2 水稻 縞葉枯病(ヒメトビウンカ媒介)

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・今年の発生量はやや多い。(+)
 - ・県中部から県南部の一部でヒメトビウンカの越冬世代保毒虫率が高い(平成21年11月時点)。(+)
- (3) 対策
 - ・地域の発生状況、発生情報に注意を払い、ほ場をよく観察する。
 - ・保毒虫率が高い地域で感受性品種(コシヒカリなど)を今後作付する場合は防除効果の高い箱施用剤を使用する。
 - ・防除対策のポイントNo.15(イネ縞葉枯病に注意しましょう)参照。
 - ・平成21年度植物防疫ニュース(速報No.10)「来年のイネ縞葉枯病の発生拡大が懸念されます！」参照。

3 いちご(親株) ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・前作の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高く、発生にやや適している。(± ~ +)
- (3) 対策
 - ・ランナー発生数が増加する前に発生が見られる場合は、粘着くん液剤[適用作物：野菜類]、アフーム乳剤などを葉裏にも良くかかるように散布する。
 - ・本ばから親株へハダニ類を持ち込まないように、管理作業は別に行う。

4 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
 - ・現在の発生量はやや少ない。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高く、発生にやや適している。(± ~ +)
- (3) 対策
 - ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は、ビニル袋などで密封してから処分するか土中に埋める。
 - ・タバココナジラミが発生しているほ場では、スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤、ベストガード水溶剤、コロマイト乳剤などをローテーション散布する。
 - ・冬春トマト栽培終了時には、野外にタバココナジラミを飛散させないため、断根後40日以上で10日以上(継続した晴天日3日以上)蒸し込みを行う。
 - ・夏秋トマトの定植時にベストガード粒剤、スタークル(アルバリン)粒剤などを施用する。
- (4) 備考
 - ・蒸し込み時の過度な高温は、施設内の器具を傷めることがあるので注意する。

5 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
 - ・現在の発生はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は平年並～高く、降水量は平年並で発生にやや適し

- (3) 対策 ている。(±~+)
 ・芽基部病斑は摘み取る。
 ・芽基部病斑上の孢子形成抑制のためE B I剤・E B I混合剤、ベルコートフロアブルなどを散布する。
- (4) 備考 ・E B I剤・E B I混合剤は耐性菌の発生を防止するため、合わせて年2回以内の使用とする。

6 なし シンクイムシ類

- (1) 発生予想 発生量(幼虫): やや多い
- (2) 根拠 ・フェロモントラップへのナシヒメシンクイ成虫誘殺数がやや多く、今後幼虫が発生すると予想される。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並~高く、降水量は平年並で発生にやや適している。(±~+)
- (3) 対策 ・発生が見られる場合は、ノーモルト乳剤、サムコルフロアブル10、ダイアジノン水和剤34[適用作物:日本なし、西洋なし]などを散布する。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量: 多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや多い。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並~高く、発生にやや適している。(±~+)
- (3) 対策 ・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コロマイト水和剤[適用害虫:ナミハダニ]、コテツフロアブルなどを散布する。

8 その他の病害虫

		現 況 発生予想				現 況 発生予想	
水 稲	葉いもち	-	平年並	トマト	葉かび病	少	少
	イネミズゾウムシ	やや少	やや少	きゅうり	アザミウマ類	多	やや多
	ニカメイガ	やや少	やや少	果 樹	カメムシ類	平年並	やや多
トマト	灰色かび病	多	やや多	き く	白さび病	やや多	やや多

斑点米カメムシ類対策は、本田内の雑草対策も重要です!

水田周辺の雑草だけでなく、本田内の雑草(ノビエ、イヌホタルイなど)も斑点米カメムシ類を誘引し、発生源となります。水田内の雑草対策でカメムシ類の生息しにくい環境をつくり、斑点米の発生を防ぎましょう。

農薬を上手に使いこなしましょう!

ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
 農薬を散布する場合には、周辺住民に周知を図り、散布の時間帯に十分注意しましょう。
 施設栽培で大きくサイド換気している場合には、薬剤散布時のドリフトに注意しましょう。

1か月気象予報(予報期間5月15日から6月14日 5月14日気象庁発表)

関東甲信地方の天気は数日の周期で変わる見込みですが、ぐずつく時期もあるでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気 温	20%	40%	40%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

NEWS & INFORMATION

県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬の適正使用等について啓発活動を行います。

「平成22年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」をお求めの方は、社団法人 栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel (028)683-5533 Fax (028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第3号

平成22年6月25日
栃木県農業環境指導センター

**なしの黒星病の多発が懸念されます。
いちごの親株でハダニ類の発生が多いので、採苗前に防除しましょう。**

予想期間 6月下旬～7月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻 いもち病(葉いもち)

(1) 発生予想

発生量：平年並

(2) 根拠

- ・BLASTAMでは、黒磯、大田原、塩谷、真岡、小山の5ヶ所で、葉いもち病感染好適日数が平年値を上回っている(6月24日現在)。(+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高く、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みで発生に適している。(+)
 - ・病害虫防除員の報告では、発生はやや少ない。(-～±)
- (3) 対策
- ・発生が見られた場合は、早急にアミスターエイト、カスラブサイドゾル等予防・治療効果のある薬剤を散布する(平年初発時期は6月第5半旬頃)。
- (4) 備考
- ・平均気温が20前後で弱い連続降雨のあるときに感染の好適条件となるため、常発地では特に注意する。
 - ・BLASTAMを、当センターホームページに掲載。

2 水稻 縞葉枯病(県南部)

(1) 発生予想

発生量：やや多い

(2) 根拠

- ・下都賀地区で6月第5半旬に縞葉枯病の発生が見られている。(+)
 - ・本田すくい取り調査の結果、すでに本田へのヒメトビウカ成虫(縞葉枯病ウイルスの媒介昆虫)の飛び込みが確認され、幼虫が確認されたほ場もあった。(+)
- (3) 対策
- ・縞葉枯病に抵抗性のない品種(コシヒカリ、なすひかり等)では、縞葉枯病の地域の発生状況、発生情報に注意を払い、ほ場を良く観察する。
- (4) 備考
- 以下を当センターホームページに掲載中。
 - ・防除対策のポイントNo.15「イネ縞葉枯病に注意しましょう」
 - ・平成21年度植物防疫ニュース(速報No.10)「来年のイネ縞葉枯病の発生拡大が懸念されます！」

3 いちご

ハダニ類

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根拠

- ・現在の発生量はやや多い。(+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・発生が多い場合、採苗前にマイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏にも良くかかるように散布する。
 - ・苗による本ほへの持ち込みを防ぐため、発生が見られる場合には、育苗初期から防除する。

4 いちご

うどんこ病

(1) 発生予想

発生量：平年並

(2) 根拠

- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1カ月は平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・親株で発生したほ場では、育苗時にも防除を行う。
 - ・高温期には病徴が見えにくくなるが、サンヨール、タフパール[適用作物：野菜類]等で薬剤防除を行い、以後定期的に予防散布を行う。
- (4) 備考
- ・タフパールは微生物農薬であるため、他剤との混用に注意する。

5 トマト コナジラミ類

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根拠

- ・夏秋トマトでの現在の発生量はやや多い。(±～+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・生育に応じて葉かきを行い、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は、ビニル袋などで密封してから処分するか土中に埋める。
 - ・タバココナジラミが発生しているほ場では、モスピラン水溶剤、アプロードエースフロアブル、ベストガード水溶剤等をローテーション散布する。
 - ・冬春トマト栽培終了時には、施設外にコナジラミ類を飛散させないため、断

- (4) 備考 根後40 以上で継続した晴天日3日以上蒸し込みを行う。
・蒸し込み時の過度な高温は、施設内の器具を傷めることがあるので注意する。

6 なし 黒星病

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 ・現在の発生は多い。(+)
・向こう1カ月の平均気温は高く、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みで発生にやや適している。(±~+)
(3) 対 策 ・発病葉および発病果は伝染源となるので速やかに取り除き、ほ場外で処分する。発生が多いほ場では、治療効果の高いストロビドフロアブル、ベルコートフロアブル等を散布する。なお、降雨が続くときは薬剤の散布間隔を短くする。
(4) 備考 ・E B I 剤・E B I 混合剤は耐性菌の発生を防止するため、合わせて年2回以内の使用とする。
・幸水は果実肥大後期の7月上旬から黒星病の感受性が高まるので注意する。

7 なし カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
(2) 根 拠 ・トラップ類への誘殺数は平年並。(±)
・今後の気象予報では気温は高く、降水量は平年並で発生にやや適している。(±~+)
(3) 対 策 ・園内をよく観察し、多発した場合にはMR・ジョーカー水和剤、ベストガード水溶剤等を散布する。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想		現 況	発生予想
水 稲	コメイチウ(心枯れ茎)	平年並	やや多	野菜類	アザミウマ類	やや多
いちご	炭疽病	やや少	平年並		ハスモンヨトウ	平年並
	萎黄病	やや少	平年並	果 樹	ナシヒメシンクイ	平年並
トマト	疫病	少	やや少	き ぐ	ハダニ類	多
きゅうり	べと病	やや少	平年並		白さび病	多

斑点米カメムシ類対策は、除草が基本です

- ・水田内や水田周辺の雑草は斑点米カメムシ類の発生源や本田内へ侵入するための中継点になりますので、除草を行うなどカメムシ類の生息しにくい環境をつくり、斑点米の発生を防ぎましょう。
- ・ホームページの「病害虫防除対策のポイントNo.14」を参照してください。

農薬を適正に使いましょう！

- ・ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
- ・農薬を散布する場合には、周辺の人や農作物等にかからないように十分注意し、周辺住民に周知を図るとともに散布の時間帯にも気を配りましょう。
- ・農薬を使用する場合は必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

1か月気象予報(予報期間6月19日から7月18日 6月18日気象庁発表)

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。向こう1カ月の平均気温は高い確率50%です。週別の気温は、1週目は高い確率80%です。2週目は高い確率60%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
気 温	20%	30%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

NEWS & INFORMATION

7月14・15日に農薬使用者を対象とした「栃木県農薬管理指導士」等養成研修が開催されます(申請書などの受付期間は6月16日~7月6日)。詳しくは、栃木県ホームページ「栃木県農薬管理指導士・ゴルフ場農薬適正使用士養成研修を開催します」を参照してください。

県では、農薬による事故等の発生防止を図るため、6月から8月の3か月間を「農薬危害防止運動期間」とし、農薬に適正使用等について啓発活動を行っています。

「平成22年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」のお求めは社団法人 栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel (028)683-5533 Fax (028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第4号

平成22年7月23日
栃木県農業環境指導センター

カメムシ類、ハダニ類、コナジラミ類の多発が懸念されます。

予想期間 7月下旬～8月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや少ない(-)。
 - ・7月中旬までのBLASTAMによる感染好適条件は多い。(+)。
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込みで、発生に不適な条件となっている。(-)。
- (3) 対策
- ・葉いもちが見られる場合は、穂ぞろい期にアミスターエイト、ブラシンフロアブル、カスラブサイドゾル等の予防・治療効果の高い薬剤を散布する。
- (4) 備考
- ・植物防疫ニュース(速報No.6)「ほ場をよく観察して穂いもち防除を行いましょう」をホームページに掲載しました。

2 水稲 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・7月上旬の雑草地すくい取りでは発生量は少～平年並だが、カスミカメ類が広く発生している。(±)。
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込みで、発生に適している。(+)。
- (3) 対策
- ・穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7～10日後)までにMR・ジョーカーEW、スタークル(スタークルメイト)液剤10等を散布する。
 - ・防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行う。
- (4) 備考
- ・植物防疫ニュース(速報No.4)「カスミカメ類(小型の斑点米カメムシ類)が平年より広範囲で発生しています！」をホームページに掲載しました。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや多い。(+)。
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)。
- (3) 対策
- ・苗による本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗床での防除を適正に行う。
 - ・葉裏を注意深く観察し、発生を認めたら気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コテツフロアブル、テデオン乳剤等を葉裏によくかかるように散布する。

4 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生は平年並である。(±)。
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に不適な条件となっている。(-)。
- (3) 対策
- ・高温期には病徴が見えにくくなるが、病徴が見えない場合でも、この時期にタフパール[適用作物：野菜類]、ジーファイン水和剤[適用作物：野菜類]等で予防する。
 - ・発生が見られたら、ベルコートフロアブル、サンヨール等を散布し、本ぼへのうどんこ病菌の持ち込みを防ぐ。
- (4) 備考
- ・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤等との混用を避ける。

5 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
- ・現在の発生はやや少ない。(-)。
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、発生に適している。(+)。
- (3) 対策
- ・強いかん水は発病を助長するので避ける。
 - ・被害株、被害茎葉及びランナーは見つけ次第取り除き、ほ場外で処分する。

- ・発生を予防するため、ゲッター水和剤(定植前日まで)、ベルコート水和剤(育苗期(定植前))等を散布する。

6 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対 策
- ・ほ場周辺の除草を徹底する。
 - ・タバココナジラミはトマト黄化葉巻病ウイルスを媒介するので、施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。
 - ・今後定植する作型では、育苗期にベストガード粒剤、スタークル(アルバリン)粒剤を株元に施用する。

7 なし カメムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・現在の発生は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込みで、発生に適している。(+)
 - ・主要な餌であるスギ、ヒノキの今年の球果量がやや少ないため、果樹園へ飛来する可能性がある。(+)
- (3) 対 策
- ・4mm目以下の多目的防災網を被覆し、園内への侵入を防ぐ。多目的防災網の隙間から侵入することもあるので注意する。
 - ・園内をよく観察し、発生が見られた場合はアグロスリン水和剤、スタークル(アルバリン)顆粒水溶剤等を散布する。
- (4) 備 考
- ・防除剤に合成ピレスロイド剤を多用するとハダニ・カイガラムシ類が多発しやすくなるので注意する。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
水 稲	縞葉枯病	やや多	やや多	な し	黒星病	多	やや多
いちご	萎黄病	少	少	ぶどう	べと病	少	少
トマト	灰色かび病	やや多	平年並	果 樹	ハマキムシ類	少	やや少
な す	アザミウマ類	平年並	やや多	き く	ハダニ類	平年並	やや多
野菜類	オオタバコガ	やや少	平年並				

1か月予報(予報期間7月16日から8月16日 7月16日気象庁発表)

天気は、平年同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気 温	20%	30%	50%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

セイヨウオオマルハナバチの導入には許可が必要です!

- ・セイヨウオオマルハナバチは、特定外来生物に指定され、飼養等が規制されています。規制の対象外である在来種マルハナバチへの切替えをしましょう。
- ・やむを得ずセイヨウオオマルハナバチを飼養する場合には、環境省の許可を取得してください。具体的な手続きは、関東地方環境事務所Tel(048)600-0817までお問い合わせください。詳しくは外来生物法サイト(<http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html>)をご覧ください。

NEWS & INFORMATION

県では6月から8月の3か月間を「農業危害防止運動期間」と定め、農薬の適正使用や農薬使用による事故防止を推進する運動を行っています。

「平成22年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」のお求めは、(社)栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel (028)683-5533 Fax (028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第5号

平成22年8月23日
栃木県農業環境指導センター

**いちご炭疽病の防除をしましょう！
ハスモンヨトウ、ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類の防除は早めに実施しましょう！**

予想期間 8月下旬～9月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 野菜類・大豆

ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想
(2) 根拠

発生量：多い
・現在、フェロモントラップへの誘殺数はやや多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対策
・施設栽培では、開口部に寒冷紗等を張り、侵入を防ぐ。
・定期的にはほ場をよく観察して早期発見に努め、発生を確認した卵塊や分散前の幼虫は寄生葉とともに摘み取り、土中に埋める。
・ハスモンヨトウの幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。

2 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想
(2) 根拠

発生量：多い
・現在の発生量は多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対策
・強いかん水は、発病を助長するので避ける。
・被害株、被害茎葉及びランナーは見つけ次第取り除き、ほ場外で処分する。
・被害株の周辺や発生の恐れがある場合には、発生を予防するため、バイコロール水和剤、ベルコート水和剤(育苗期(定植前))等を散布する。

3 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想
(2) 根拠

発生量：やや少ない 発生時期：やや遅い
・現在の発生はやや少ない。(-)
・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生にやや不適な条件となっている。(±~-)
(3) 対策
・高温期に病徴が見えない場合でも、この時期にタフパール[適用作物：野菜類]、ジーファイン水和剤[適用作物：野菜類]等で予防する。
・発生が見られたら、パンチョTF顆粒水和剤、サンヨール等を散布し、本ほへのうどんこ病菌の持ち込みを防ぐ。
(4) 備考
・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

4 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想
(2) 根拠

発生量：多い
・現在の発生量はやや多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対策
・育苗期に防除を行い、本ほへの持込みを防ぐ。
・葉裏を注意深く観察し、発生を認めたら気門封鎖系薬剤をスポット散布する。
・発生が多く見られる場合は、アフーム乳剤、コロマイト水和剤等を葉裏によくかかるように散布する。

5 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想
(2) 根拠

発生量：やや多い
・夏秋トマトでの現在の発生量は平年並。(±)
・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みで、発生に適している。(+)
(3) 対策
・タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスを媒介するので、施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。
・今後定植する作型では、育苗期、定植時にベストガード粒剤、スタークル粒剤(アルバリン粒剤)を使用する。
(4) 備考
・近紫外線カットフィルム、粒剤は、マルハナバチに影響があるので注意する。

6 きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 掘 ・現在の発生量はやや多い。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みで、発生に適している。(+)
 (3) 対策 ・施設開口部に銀色の防虫ネット等を張るとともに、近紫外線カットフィルムや光反射シート等を利用して、施設内へのアザミウマ類の進入を防ぐ。
 ・今後定植する作型では、定植時にベストガード粒剤[適用害虫：ミナミキイロアザミウマ]、オンコル粒剤5[適用害虫：ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ]等を使用する。
 ・発生が見られる場合は、スピノエース顆粒水和剤、コテツフロアブル[適用害虫：ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ]等を葉裏によくかかるように散布する。

7 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
 (2) 根 掘 ・現在の発生量は多い。(+)
 ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みで、発生に適している。(+)
 (3) 対策 ・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コロマイト水和剤[適用害虫：ナミハダニ]、コテツフロアブルなどを散布する。

8 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
水 稲	穂いもち病(普通植)	少	少	な し	黒星病	平年並	平年並
	縞葉枯病	多	多			ナシヒメシンクイ	やや少
いちご	萎黄病	やや少	平年並	ぶどう	べと病	やや多	平年並
	ハダニ類	平年並	やや多			りんご	ハダニ類
な す	アザミウマ類	多	多	果 樹	カメムシ類	やや少	平年並
	黒斑病	平年並	平年並			き く	白さび病
ね ぎ	アザミウマ類	多	多				

大豆の紫斑病・カメムシ類防除について

- ・紫斑病とカメムシ類の防除適期は隣接しているため、同時防除が可能です。
- ・防除適期 紫斑病：開花期20日後から9月上旬
 カメムシ類：開花期15日後から10～14日間隔

水稻の縞葉枯病の発生に注意しましょう！

- ・本年は、発生地域が県全域に拡大しています。出穂後は後期発病（出すくみ）が見やすくなるため、ほ場での発病状況を確認し、次作への対策を検討しましょう。

セイヨウオオマルハナバチの導入には許可が必要です！

- ・セイヨウオオマルハナバチは、特定外来生物に指定され、飼養等が規制されています。規制の対象外である在来種マルハナバチへの切替えをしましょう。
- ・やむを得ずセイヨウオオマルハナバチを飼養する場合には、環境省の許可を取得してください。
- ・具体的な手続きは、関東地方環境事務所 Tel(048)600-0817 までお問い合わせください。詳しくは外来生物法サイト(<http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html>)をご覧ください。

1か月気象予報（予報期間8月14日から9月13日 8月13日気象庁発表）

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は高い確率70%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
気 温	10%	20%	70%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

NEWS & INFORMATION

各種トラップにおける害虫の誘殺数のグラフは、当ホームページに掲載しています。
 「平成22年度 農作物等病害虫雑草防除の手引き」のお求めは、(社)栃木県植物防疫協会にお問い合わせください。Tel (028)683-5533 Fax (028)683-5530

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。
 詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。
 当センター携帯サイト(<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。
 Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第6号

平成22年9月17日
栃木県農業環境指導センター

**ハスモンヨトウの侵入に注意しましょう！
イネ縞葉枯病予防のため、早めに秋耕しましょう！**

予想期間 9月下旬～10月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 野菜類・大豆 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・野菜類、大豆で現在の幼虫発生量が多い。(+)
 - ・フェロモントラップによる成虫の誘殺数が多い。(+)
 - ・向こう1か月の平均気温は高く、降水量は少ない見込みで増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・定期的にほ場をよく観察して早期発見に努め、発生を確認した卵塊や分散前の幼虫は寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・施設栽培では、開口部に寒冷紗等を張り、侵入を防ぐ。
 - ・今年の大豆には幅広いステージの幼虫が発生しているため、幼虫の発生が見られる場合は適確な防除をする。
- (4) 備考
- ・幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期に薬剤を散布する。
 - ・当センターホームページ「ハスモンヨトウ3齢幼虫の薬剤感受性検定」参照(適用作物注意)。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並 発生時期：やや遅い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は平年並。(±)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に不適な条件となっている。(-)
- (3) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な肥培管理を行う。
 - ・今年は高温のため初発が遅れると考えられるが、病徴が見えない場合でも、この時期にタフパール<適用作物：野菜類>、カリグリーン<適用作物：野菜類>等で予防する。
 - ・発生が見られる場合はE B I剤、ストロビーフロアブル等を葉裏にもよくかかるとように散布する。
- (4) 備考
- ・育苗期に発生が見られた場合は、ほ場内に菌を持ち込んでいる可能性が高いので特に注意する。
 - ・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや多い。(+)
 - ・向こう1か月の降水量は少ない見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・葉裏をよく観察し、発生がみられたら、早めに気門封鎖系薬剤をスポット散布して拡大を防ぐ。
 - ・マルチをする前の下葉かきにあわせてテデオン乳剤、アフーム乳剤等を散布する。
 - ・スパイカルE X<適用作物：野菜類>等の天敵農薬を使用する場合は、放飼前に必ず防除を行い発生密度を低下させる。
- (4) 備考
- ・植物防疫ニュース(速報No. 8)「いちごのハダニ類の発生が平年より多く推移しています。本ぼ定植前に防除を行い、持ち込みを防ぎましょう。」参照。

4 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・病害虫防除員の報告では、現在の発生量はオンシツコナジラミが平年並。(±) タバココナジラミがやや少ない。(-)
 - ・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・ほ場周辺の除草を徹底する。
 - ・タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスを媒介するので、施設の開口部

に 0.4mm 目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。

・育苗期、定植時にベストガード粒剤、スタークル（アルバリン）粒剤を使用する。

(4) 備考 ・近紫外線カットフィルム、粒剤は、マルハナバチに影響があるので注意する。

5 きく ハダニ類

(1) 発生予想

発生量：多い

(2) 根 拠

・現在の発生量は多い。(+)

・向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)

(3) 対策

・下葉や葉裏に多く発生するので、その部分に薬剤がよくかかるように散布する。生育初期から防除することでその後の発生密度を抑制できる。

・葉裏をよく観察し、発生が認められたら、気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル[適用害虫：ナミハダニ]、ダニサラバフロアブル<適用作物：花き類・観葉植物>等を散布する。

6 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
大豆	吸実性かみシ類	多	多	にら	白斑葉枯病	少	少
	アザミウマ類	平年並	やや多	ねぎ	アザミウマ類	多	やや多
いちご	炭疽病	多	やや多		黒斑病	やや少	やや少
	アブラムシ類	平年並	やや多	茎葉菜類	オオタバコガ	少	やや少
なす	アザミウマ類	多	多	くり	アザミウマ類	少	やや少
きゅうり	アザミウマ類	多	多	きく	白さび病	少	少

イネ縞葉枯病、黄萎病

・再生稲での発生は次年度の伝染源になるので、早めに秋耕を行う。

コムギ縞萎縮病

- ・農林61号、タマイズミは罹病しやすいため注意する。
- ・土壤感染を防止するため、作業順序に気を配り、作業機の洗浄に心がける。
- ・排水対策を行う。湿田では暗きょ等の積極的な対策を行う。
- ・早播きすると発生しやすいので、播種適期内の遅めの時期に播種する。

なし黒星病

・病原菌は、芽や落葉で越冬し翌年の発生源となるので、収穫終了後は必ず薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分する。

セイヨウオオマルハナバチの導入には許可が必要です！

- ・セイヨウオオマルハナバチは、特定外来生物に指定され、飼養等が規制されています。規制の対象外である在来種マルハナバチへの切替えをしましょう。
- ・やむを得ずセイヨウオオマルハナバチを飼養する場合には、環境省の許可を取得してください。
- ・具体的な手続きは、関東地方環境事務所 Tel(048)600-0817 までお問い合わせください。詳しくは外来生物法サイト (<http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html>) をご覧ください。

1か月気象予報（予報期間9月11日から10月10日 9月10日気象庁発表）

関東甲信地方の天気は、数日の周期で変わるでしょう。平年に比べて晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週目は高い確率が80%、2週目は高い確率が60%、3～4週目は、高い確率が50%です。

	低い(少ない) 確率	平年並の確率	高い(多い) 確率
気温	10%	20%	70%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	20%	40%	40%

NEWS & INFORMATION

「栃木県農薬管理指導士」養成研修会が11月15日、16日に栃木県総合文化センターにおいて開催されます。詳しくは農政部経営技術課環境保全型農業担当までお問い合わせください。

Tel(028)623-2286

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

当センター携帯サイト (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>) もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第7号

平成22年10月22日
栃木県農業環境指導センター

ハスモンヨトウが依然として多いので、早期発見、早期防除に努めましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 野菜類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は多い。(+)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・定期的にはほ場をよく観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫は寄生葉とともに摘み取り、土中に埋める。また、卵塊は植物体だけでなく、鉄骨パイプ等の資材にも産みつけられるため、見逃さないように注意する。
 - ・施設栽培では、開口部に防虫ネット等を張り、成虫の侵入を防ぐ。
 - ・ほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草する。
 - ・幼虫は齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、発生初期に薬剤を散布する。また、薬剤を散布する際には、葉裏によくかかるよう丁寧に散布する。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠
- ・現在の発生量はやや少ない。(-)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高い見込みで、発生に適している。(+)
- (3) 対策
- ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
 - ・現在発生が見えなくても、今後発生する可能性があるため、保温開始までにタフパール<適用作物：野菜類>、サンヨール等で予防する。
 - ・施設のサイドを降ろし、加温を開始したら、硫黄粒剤でくん煙する。
 - ・発生初期にアミスター20フロアブル、フルピカフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備考
- ・タフパールは微生物農薬であるため、他の殺菌剤との混用を避ける。

3 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠
- ・現在の発生量は少ない。(-)
 - ・向こう1カ月の降水量は平年並みで、日照時間が少ない見込みで、発生にやや適している。(+)
- (3) 対策
- ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を稼働し、植物体表面の結露を除去する。
 - ・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので早急に取り除き、施設外で処分する。
 - ・発生初期にカリグリーン、フルピカフロアブル等を散布する。
- (4) 備考
- ・草勢過多の場合は天候不順により発生しやすいので注意する。
 - ・予防としてボトキラー水和剤<適用作物：野菜類>のダクト内投入を行う場合には、予め薬剤散布等で菌密度を下げておく。

4 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠
- ・現在の発生は平年並。(±)
 - ・向こう1カ月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対策
- ・施設内外の除草や、施設内の不要な作物を除去する。
 - ・今後定植する作型では、育苗期または定植時にベストガード粒剤、スタークル粒剤(アルバリン粒剤)を使用する。
 - ・生育に応じて葉かきし、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は土中に埋めたり、ビニル袋等で密封して枯死させてから処分する。
 - ・施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。光反射シートや近紫外線カットフィルムも効果がある。
 - ・施設内や施設周辺に黄色粘着トラップを設置し、成虫を捕殺する。
 - ・発生初期に粘着くん液剤[適用害虫：外コナジラミ類(シハ-リーコナジラミを含む)]、サンクリスタル乳剤等の物理的防除剤で防除する。
 - ・タバココナジラミが発生しているほ場では、クリアザールフロアブル、サンマイトフロアブル等をローテーション散布する。
- (4) 備考
- ・粒剤、近紫外線カットフィルムはマルハナバチに影響があるので注意する。

5 きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生は多い。(+)
・向こう1カ月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
- (3) 対 策 ・施設内外の除草や、施設内の不要な作物を除去する。
・施設開口部に防虫ネット等を張り、施設内への侵入を防ぐ。
・施設内に青色粘着トラップを設置し、早期発見に努める。
・発生初期にモスピラン水溶剤〔適用害虫：ミミキアザミウマ〕 アファーム乳剤〔適用害虫：ミミキアザミウマ〕等を散布する。
- (4) 備 考 ・当センターホームページに「[きゅうりから採集したミナミキイロアザミウマの薬剤感受性検定結果](#)」を掲載中。

6 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想	
いちご	ハダニ類	平年並	やや多	きゅうり	褐斑病	多	多	
	萎黄病	やや少	やや少		にら	ネダニ類	多	多
	アブラムシ類	多	多			白斑葉枯病	やや少	やや少
	アザミウマ類	やや多	多		野菜類	オオタバコガ	やや多	多
	炭疽病	やや多	平年並		きく	ハダニ類	多	多
トマト	黄化葉巻病	少	少		白さび病	少	少	

秋冬期の病害虫対策

イネ縞葉枯病、イネ黄萎病

- 再生稲での発生は次年度の伝染源になるので、早めに秋耕を行う。

コムギ縞萎縮病

- 農林61号、タマイズミは罹病しやすいため注意する。
- 土壌感染を防止するため、作業順序を考慮し、作業機の洗浄に心がける。
- ほ場周囲の排水溝設置と合わせて、弾丸暗渠や心土破砕を実施するなど、排水対策を確実にを行う。
- 早播きすると発生しやすいので、発生が予想されるほ場に作付する場合、播種適期の晩限まで播種を遅らせ、播種量をやや多め又は施肥量を増やす。
- 地域別の播種適期は以下の通り。
 - 県北部：11月 1日～11月10日
 - 県中部：11月 6日～11月15日
 - 県南部：11月 9日～11月18日

ナシ黒星病

- 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分する。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意する。

農薬を適正に使いましょう！

- ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。
- 農薬を散布する場合には、周辺の人や農作物等にかからないように十分注意し、周辺住民に周知するとともに散布の時間帯にも気を配りましょう。
- 農薬を使用する場合は必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

1か月気象予報（予報期間10月16日から11月15日 10月15日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わってでしょう。向こう1カ月の平均気温は、高い確率が50%です。週別の気温は、1～2週目は高い確率が50%、3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	20%	30%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	40%	30%	30%

NEWS&INFORMATION

「栃木県農薬管理指導士」養成研修会が11月15日、16日に栃木県総合文化センターにおいて開催されます。詳しくは農政部経営技術課環境保全型農業担当 Tel(028)623-2286 までお問い合わせください。

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できます。

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

当センター携帯サイト (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>) もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第8号

平成22年11月22日
栃木県農業環境指導センター

ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類の発生がやや多めです！

予想期間 11月下旬～12月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
(2) 根拠 現在の発生はやや少ない。(-)
向こう1か月の平均気温は高い見込みで、発生に好適な条件となっている。
(+)
(3) 対策 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
現在発生が見えなくても今後発生する可能性があるため、硫黄粒剤でくん煙する。
発生初期にサンヨール、ベルコートフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
(2) 根拠 現在の発生はやや多い。(+)
向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
(3) 対策 ハダニ類は下葉に多いので、必要に応じて下葉かきを行う。
発生初期に気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、マイトコーネフロアブル、コロマイト水和剤等を葉裏にもよくかかるように散布する。
(4) 備考 ハダニ類の薬剤抵抗性の発達を防ぐため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
当センターHPに「[いちごのナミハダニの卵の薬剤感受性検定](#)」「[いちごのナミハダニの雌成虫の薬剤感受性検定](#)」を掲載中。

3 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
(2) 根拠 現在の発生は少ない。(-)
今後、ハウス内が多湿となりやすく、発生に好適な条件となっている。(+)
(3) 対策 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
咲き終わった花卉や発病果、発病葉は、伝染源となるので早急に取り除き、施設外で処分する。
防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入による防除を行う。なお本剤は発病前からの継続した使用が効果的である。
発生初期にフルビカフロアブル、サンヨール等を散布する。
(4) 備考 暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入は、薬剤等で灰色かび病の発生密度を下げてから行う。

4 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
(2) 根拠 現在の発生は平年並。(±)
向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
(3) 対策 葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去するため、生育に応じて葉かきを実施する。
施設内や周辺に黄色粘着トラップを設置し、成虫を捕殺する。
発生初期に粘着くん液剤[適用害虫：タバココナジラミ類(シルバーリーフコナジラミを含む)]、サンクリスタル乳剤等の物理的防除剤で防除する。
タバココナジラミはトマト黄化葉巻病ウイルスを媒介するので、施設の開口部に0.4mm目以下の防虫ネットを張り侵入を防ぐ。
タバココナジラミが発生しているほ場では、アプロードエースフロアブル、サンマイトフロアブル等をローテーション散布する。
(4) 備考 粘着くん液剤の散布後は、過湿を避け薬液が乾くようにする。また原則として他剤との混用は避ける。

5 きゅうり アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
(2) 根 拠 現在の発生は多い。(+) 向こう1か月の平均気温は高い見込みで、増殖に適している。(+)
(3) 対 策 ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、施設開口部に銀色の防虫ネット等を張り、施設内への侵入を防ぐ。青色粘着トラップを施設内に設置し、アザミウマ類の早期発見に努める。発生初期にスピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤[適用害虫：ミナミキイロアザミウマ]等を散布する。
(4) 備 考 アザミウマ類の薬剤抵抗性の発達を防ぐため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
当センターHPに「[きゅうりから採集したミナミキイロアザミウマの薬剤感受性検定](#)」を掲載中。

6 には 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根 拠 現在の発生は平年並。(±) ビニル被覆後、施設内が多湿となりやすく、発生に好適な条件となっている。(+)
(3) 対 策 施設内が多湿とならないよう、日中に適度な換気を行う。捨て刈りした葉は伝染源になるので、施設外へ持ち出し、土中に埋めるなど適切に処分する。発生初期にセイビアーフロアブル20、ポリオキシシAL水溶剤等を散布する。

7 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想
トマト うどんこ病	やや少	平年並	には ネダニ	多	やや多
黄化葉巻病	やや多	平年並	野菜類 ハスモンヨトウ	やや多	平年並
きゅうり うどんこ病	平年並	やや多	きく 白さび病	少	少
褐斑病	やや多	平年並	ハダニ類	平年並	やや多

冬期の病害虫防除対策

イネ縞葉枯病、イネ黄萎病

再生稲での発生は次年度の伝染源となるので水田の耕起を早めに行いましょう。またヒメトビウンカやツマグロヨコバイ等は水田及びその周辺の雑草で越冬するので、密度を下げるため畦畔等の除草を行いましょう。

1か月予報(予報期間11月13日から12月12日 11月12日気象庁発表)

関東甲信地方の天気は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は高い確率50%です。週別の気温は、1週目は平年並または高い確率40%、2週目は高い確率50%、3~4週目は高い確率40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	20%	30%	50%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

農薬を適正に使いましょう!

ミツバチやマルハナバチに対する安全日数を目安に薬剤を選択しましょう。

農薬を散布する場合には、周辺の人や農作物等にかからないように十分注意し、周辺住民に周知を旨るとともに散布の時間帯にも気を配りましょう。

農薬を使用する場合は必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守りましょう。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

平成22年度 病害虫発生予報 第9号

平成22年12月17日
栃木県農業環境指導センター

いちごのハダニ類とアブラムシ類の発生がやや多くなる予想です！ にらの白斑葉枯病の多発が懸念されます！

予想期間 12月下旬～1月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
(2) 根拠 ・現在の発生量は少ない。(-)
・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは低い見込みである。(-～±)
(3) 対策 ・軟弱徒長すると発生が多くなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
・発生を予防するため、硫黄粒剤によるくん煙を行う。
・発生初期にフルピカフロアブル、ダイマジン等を葉裏にもよくかかるように散布する。

2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
(2) 根拠 ・現在の発生量は少ない。(-)
・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは低い見込みである。(-～±)
・今後、施設内が多湿となりやすく、発生に好適である。(+)
(3) 対策 ・ハウス内の低温多湿が発生助長要因となるので、下葉を取り除き風通しを良くするとともに、かん水は必要最小限にとどめる。
・発病果実等は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
・発生初期にフルピカフロアブル、セイビアーフロアブル20等を散布する。
・降雨が続いて湿度が高い場合は、ロブラールくん煙剤等の使用も効果的である。
(4) 備考 ・灰色かび病は、収穫直前の果実に発病しやすい。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 ・現在の発生はやや多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は、平年並もしくは低い見込みである。(-～±)
(3) 対策 ・発生が見られた場合、下葉かきを行い発生密度を下げ、エコピタ液剤等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、ダニトロンフロアブル、カネマイトフロアブル等を葉裏にもよくかかるように散布する。
(4) 備考 ・春先の多発を防ぐため、厳寒期に防除を適切に行うことが重要である。

4 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
(2) 根拠 ・現在の発生は多い。(+)
・向こう1か月の平均気温は、平年並もしくは低い見込みである。(-～±)
(3) 対策 ・発生が見られた場合、ウララDF、チェス顆粒水和剤等を発生場所によくかかるように散布する。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
(2) 根拠 ・現在の発生はやや少ない。(-)
・今後施設が多湿となりやすく、発生に好適となる。(+)
(3) 対策 ・ハウス内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
・咲き終わった花卉や発病果、発病葉は伝染源となるので速やかに取り除き、ハウス外で処分する。
・防除は予防を基本とし、暖房機を利用したボトキラー水和剤のダクト内投入を行う。
・発生初期に、カリグリーン、ポリオキシソルボンA L水溶剤等を散布する。

6 トマト コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない

- (2) 根 拠 ・現在の発生はやや少ない。(-)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並もしくは低い見込みである。(- ~ ±)
- (3) 対 策 ・生育に応じて葉かきを実施し、葉裏に寄生した幼虫や蛹を除去する。除去した葉は埋設やビニル袋等で密封し枯死させてから処理する。
 ・施設内に黄色粘着トラップを設置し、コナジラミ類を捕殺する。
 ・粘着くん液剤等を定期的に散布し、コナジラミ類を低密度に抑える。
 ・タバココナジラミの発生が見られる場合は、ベストガード水溶剤、スタークル(アルパリン)顆粒水溶剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・ベストガード水溶剤は、散布後マルハナバチを放飼できるまでの期間の目安が10日なので注意する。

7 トマト 黄化葉巻病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・現在の発生はやや多い。(+)
 ・現在のコナジラミ類の発生量はやや少ない。(-)
- (3) 対 策 ・タバココナジラミの吸汁によって媒介されるので、タバココナジラミの防除を行う。
 ・罹病株は伝染源となり、タバココナジラミの媒介により周辺ほ場への拡散も懸念されるので、見つけしだい速やかに抜き取り、さらに土中に埋設するか、ビニル袋等で密封し枯死させてから処理する。
- (4) 備 考 ・「病害虫対策のポイントNo.9」を参照。

8 には 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生はやや多い。(+)
 ・今後、施設内が多湿となりやすく、発生に好適となる。(+)
- (3) 対 策 ・ハウス内が多湿にならないよう、日中に適度な換気を行う。
 ・発生初期に、ストロビーフロアブル、ポリオキシシンAL水溶剤等を散布する。

9 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない。(-)
 ・向こう1か月の平均気温は平年並みもしくは低い見込みである。(- ~ ±)
- (3) 対 策 ・発生が見られた場合、粘着くん液剤等の気門封鎖系薬剤をスポット散布するか、コロマイト水和剤〔適用害虫：ナミハダニ〕、カネマイトフロアブル等を散布する。

10 その他の病害虫

	現 況	発生予想		現 況	発生予想		
いちご	萎黄病	やや多	平年並	きゅうり	アザミウマ類	やや多	平年並
	コナジラミ類	やや少	やや少			コナジラミ類	平年並
トマト	葉かび病	少	少	には	乾腐病	やや多	平年並
きゅうり	べと病	少	少		ネダニ	多	やや多
	褐斑病	平年並	やや少	きく	白さび病	少	少

農薬を上手に使いこなしましょう！

ハウス内で農薬を散布するときは、午前中のうちに葉裏にも薬剤がよくかかるように散布する。同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。薬剤散布については、ミツバチ、マルハナバチに対する安全日数を十分考慮する。

1か月予報(予報期間12月11日から1月10日 12月10日気象庁発表)

天気は、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。週別の気温は、1週目は、高い確率が50%です。2週目は、低い確率が50%です。3~4週目は、平年並みまたは低い確率ともに40%です。

	低い(少ない)確率	平年並の確率	高い(多い)確率
気温	40%	40%	20%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。
 Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012